

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6.女が階段を上る時

6-1

一泊二日の越前町への小旅行から帰ってきた真紀は、11月20日月曜日の午前8時ごろに自室のベッドで目覚めると、いつものようにカーテンを開けた。

見慣れた景色を、昨夜から降り続けている雨が濡らしている。

真紀はここ数年前から、東京メトロ銀座線の銀座駅まで徒歩十分足らずの十六階建て賃貸マンションの7階にある2LDKに居住していた。

いつもは地階の駐車場に止まっているはずの愛車を、長距離の走行と海風に曝したこともあって、横田を上野のアトリエへ送った際に「呑み直さないか？」と誘われたが、咄嗟に「日曜はだめよ」とやんわり断りを言う前から、しぶしぶ降り立った男に軽くクラクションを鳴らすと、旅疲れを押して閉店間際の西麻布にある馴染みのディーラーにメンテナンスも兼ねて預けてきていた。

真紀は午前中を、無力感と得体の知れない気怠さが心の襞に纏わりついて、吐き出しようもなく溜まっている状態で過ごした。

ご多分に漏れず真紀もガラパゴス携帯電話（ガラケー）を持っていた。

梅雨明けの頃、五月末に新発売されたソフトバンクモバイル905SHに機種替えをしていた。手のひらサイズで143グラムと軽量なうえに、液晶ディスプレイが右に90度回転し横画面にもなった。また、ミニSDへの録画が可能になり、テレビ画面を見ながらメールや通話ができる。

お店では着物姿が多かったのも、数寄屋袋に入れて帯に忍ばせておくこともできたけれど、携帯電話番号を知っているのは、マネージャーとチーママの他数名だったので、やむを得ない事情以外、その必要はなかった。

パソコンも、顧客の一人、大手広告代理店の幹部役員の勧めで、富士通ノートパソコンを購入して、驚くほどシンプルに運用できる顧客管理ソフトを導入した。その上、お洒落なホームページも開設することもできた。

真紀の名刺には、店の住所、フリーダイヤル、Eメールアドレス、URLが書かれていて、開店前の予約などは電話転送サービスを利用していた。

個人電話番号を聞いたがる多くの馴染み客に対し、真紀は長年培ったかわし術でサラリと受け流すことができた。

それと言うのも、一流クラブでの遊び方を心得ている客層の多くは下心に内在するプライドさえ傷つけなければ、『こはる』のママの個人電話番号をゲットすることが、限られた客同士の間で、『竹取物語』に登場する求婚者よろしく、滑稽さに軽妙洒脱な軽みを楽しむ隠語ゲーム化したりもした。